

7. Gergely P Jr, Poór G (2004) Relapsing polychondritis. *Best Pract Res Clin Rheumatol* 18:723–738
8. Watkins S, Magill JM Jr, Ramos-Caro FA (2009) Annular eruption preceding relapsing polychondritis: case report and review of the literature. *Int J Dermatol* 48:356–362. doi:10.1111/j.1365-4632.2009.03935.x
9. Enright H, Miller W (1997) Autoimmune phenomena in patients with myelodysplastic syndromes. *Leuk Lymphoma* 24:483–489
10. Németh-Normand F, Machet L, Vaillant L, Fontes V, Lefrancq T, Lorette G (2002) [Cutaneous vasculitis, myelodysplasia and relapsing polychondritis]. *Ann Dermatol Venereol* 129:1299–1302. [Article in French]

# 関節症状から全身性疾患を診る

## 再発性多発軟骨炎

### Relapsing polychondritis

鈴木 登

Noboru Suzuki

聖マリアンナ医科大学 免疫学

Department of Immunology, St. Marianna University School of Medicine

キーワード

軟骨細胞

再発

炎症

耳介

気道

再発性多発軟骨炎relapsing polychondritis (RP)は、自己免疫の要素を持ちつつ、全身の軟骨組織に再発性の炎症を来たす比較的まれな難治性疾患である。1923年に初めて報告され、外耳の腫脹、鼻梁の破壊、発熱、関節炎を呈する場合が典型的である。しかし内耳をはじめとして必ずしも軟骨細胞が存在しない部位にも炎症・病変が認められる場合があり、多彩な症状を示す。

実際、外表から分かる軟骨病変以外の症状で初発したRP症例を診断するのは極めて難しい。我々が平成21年度に厚生労働

省の調査研究事業として研究奨励分野に再発性多発軟骨炎の調査研究班が採択されたときから、ほぼ同時期に患者会も組織されて、全国レベルで研究が進展している。[1-5]

ここでは、「再発性多発軟骨炎の診断と治療体系の確立」研究班の成果を踏まえてRPの活動性の評価法relapsing polychondritis disease activity index (RPD AI)[6]と重症度分類の試案、心血管合併症など最新の知見を紹介する。

疫学的には、米国からは人口100万人当たりRP患者3.5人と報告されている。[7] 当研究班で行った全国主要病院からの疫学調査と(アンケート回収143通、回収率29.5%、合計症例239例)、人口動態を鑑みるとおおよそ400~500人と推定している。[1]

本邦では、発症年齢は3歳から97歳まで広範囲におよび、平均発症年齢は53歳、男女比はほぼ1である。

生存率は1986年の報告では、10年生存率55%とされていた。その後の報告(1998年)では、8年生存率94%と報告されている。我々の調査では報告症例のな

かの9%が死亡していたことから、90%以上の生存率と推定している。[1, 2, 7, 8]

#### 病因・病態

現在でも、原因・病態の解明が進まず治療も重症例にはコンセンサスが無い。軟骨中のtype II コラーゲンに対する自己抗体の存在や自己免疫関連疾患の合併などから自己免疫の関与も考えられている。[8] RPの炎症は、耳介、鼻柱、強膜、心臓弁膜部の弾性軟骨、軸骨格関節における線維軟骨、末梢関節および気管の硝子軟骨等のすべての軟骨で起こりうる。炎症発作時の症状は、軟骨部の発赤、腫脹、疼痛であるが、重症例では発熱、全身倦怠感、体重減少もみられる。また、各軟骨間で発症頻度が異なる。表1にMcAdamsによる報告と、われわれの成績の特徴をまとめた。[1, 2, 9]

皮膚症状 これまでの欧米からの報告によれば患者の17%から38%に皮膚症状を認めるとされている。白血球破碎性血管炎、結節性紅斑、皮下脂肪組織炎、蕁麻疹、多形性紅斑、乾癬、肉芽腫、脱毛症、爪の成長遅延、再発血栓性静脈炎が知られている。皮膚の生検ではしばしば、壊死性、白血球破碎性あるいは肉芽腫性の血管炎を認めるとされている。

さらに血管炎の合併頻度としては10%から18%とされる。

本邦では約15%程度の患者で皮膚症状を認めた。上記の皮膚症状に加えて皮膚潰瘍、毛囊炎様皮疹、Sweet病なども認めている。[1, 2, 7, 8, 9, 10]

骨髄異形成症候群MDSを合併するRP患者5例では全例が皮膚症状を伴い、ひとつの特徴と考えられる。RP患者に合併するMDSは通常に観察されるMDS症例よりも予後が良い事が疫学調査から示唆された。一方、髄膜炎/脳炎を合併するRP患者では

皮膚症状を伴う事が少ない事も示された。[10]

耳鼻科的な症状としては突然の難聴やめまいを起こすこともある。多発関節炎もよく認められ、通常、移動性で、左右非対称性で、骨びらんや変形を起こさないとされている。他の大規模レポートも参考にすると欧米との比較では、本邦では関節軟骨炎と心・血管系障害の頻度が低い印象がある。[1, 2, 7, 8, 9]

喉頭から気道の軟骨病変によって嘔声、窒息感、喘鳴、呼吸困難などをもたらす。あるいは気管や気管支の壁の肥厚や狭窄は当初は無症状の事もあり、逆に二次性の気管支炎や肺炎を伴うこともある。呼吸器症状初発例では80%以上に気管切開を要するようになると報告されている。本邦RPにおいてはほぼ半数の症例が気道病変を持っていた。

RPの気道病変は炎症による気道の肥厚、炎症に引き続く気道線維化、軟骨消失に伴う吸・呼気時の気道虚脱、両側声帯麻痺等である。気道狭窄と粘膜機能の低下はしばしば肺炎を引き起こす。

炎症時には気道過敏性が亢進していて、気管支喘息との鑑別が難しいことがある。気道病変を持つ患者では吸引、気管支鏡、気切、気管支生検等の処置はすべて呼吸困難とその後の死亡の誘因となるため、気道を刺激する処置は最小限に留めるべきである。その意味で気道でのバイオプシーはできるだけ避けるべきである。一方で気道閉塞の緊急時には気切および気管チューブによる呼吸管理が必須である。次に重要な生命予後の決定因子としては心・血管系症状[5]と中枢神経症状[3]がある。本邦では心・血管系症状を伴うRP症例の死亡率は35%に及ぶ。狭心症・心筋梗塞、大動脈弁閉鎖不全や僧房弁閉鎖不全などの心臓弁膜症、動脈瘤などの大動脈病変を伴うこ

とがある。心・血管系症状においては、無症状にかかわらず病変が進行することも多く積極的な検索が望まれる。外科的な手術が必要になる場合もあるが、軟骨炎のために必ずしも成功率は高くないとされる。[11]

本邦では脳梗塞、脳出血、脳炎、髄膜炎等の中中枢神経障害を全経過中のおよそ1割の患者に認める[3]。中枢神経障害合併症例は本邦では男性に有意に多く、平均年齢も高く、中枢神経症状を伴ったRP症例の死亡率は18%と高いことが明らかになった。[3]

眼症状としては、強膜炎、上強膜炎、結膜炎、虹彩炎、角膜炎を伴うことが多い。まれには視神経炎をはじめとする重症な眼症状から失明に至ることもある。

## 診断

現在用いられている診断基準としてはMcAdamsの診断基準(1976年)[9]やDamianiの診断基準(1979年)[12]がある[表2]。①両側の耳介軟骨炎②非びらん性多関節炎③鼻軟骨炎④結膜炎、強膜炎、ぶどう膜炎などの眼の炎症⑤喉頭・気道軟骨炎⑥感音性難聴、耳鳴り、めまいの蝸牛・前庭機能障害、の6項目の3項目以上を満たす、あるいは1項目以上陽性で、確定的な組織所見が得られる場合に診断される。

提唱されている他の診断基準に関しては、類縁の疾患との鑑別に不十分な印象を持っており、McAdamsの診断基準(とそこから派生したDamianiの診断基準)が基本と考えている。[9, 12]

診断を確定する目的で、病変部の生検を行い、組織学的に軟骨組織周囲への炎症細胞浸潤を認める事を確認する。

生検のタイミングは極めて重要である。現状では診断確定のため生検所見が必須と言いたいところであるものの、疑いない症状

(症状の組み合わせ)を示している患者でも生検標本に軟骨の炎症所見が得られない場合もある。

疾患活動性と重症度分類RPでは全身の臓器病変の程度、その組み合わせにより重症度を判定して適切な治療方針を決定することが重要である。

重症度の判定基準にコンセンサスは無いが、我々は以下に述べるrelapsing polychondritis disease activity index RPDAI[表3][6]を基本にした試案[表4]を提唱している。

多彩な症状を持つRPでは診断後においても疾患活動性を評価することは容易ではない。我々は国際多施設共同研究を行い、RPの疾患活動性を評価する指標としてRPDAI [表3][6]を提唱した。RPDAIそのものに関しても、今後実際の症例を対象に前向き試験でその有用性の多面的に評価する必要はあるものの、我々は現時点ではRPDAIを基盤に次に示す重症度分類が妥当であると考えている。我々が提唱した重症度分類を要約する。①致死的になりうる心血管、神経症状、呼吸器症状のあるものは、その時点で重症と考える。②腎不全、失明の可能性を持つ網膜血管炎も重症と考える。③それ以外は症状検査所見の総和で重症度を評価している。④総合計が13点以上を重症、8点以上を中等症、それ以下を軽症と判定する。[表4]診断と重症度判定に必要な検査RPの診断に特異的な検査は現時点では存在しないので、診断基準を基本として、臨床所見、血液検査、画像所見、および軟骨病変の生検の総合的な判断によって診断がくだされる。生命予後を考慮すると軽症に見えても気道病変、心・血管系症状および中枢神経系の精査は必須である。

### a. 血液検査所見

炎症状態を反映して血沈、CRP が上昇し、正球性正色素性貧血を認める。一部の患

者では抗 type II コラーゲン抗体陽性, 抗核抗体陽性, リウマチ因子陽性, 抗好中球細胞質抗体 (ANCA) 陽性となる。マトリックスメタロプロテナーゼの増加も認める。慢性炎症(あるいは急性炎症の再発)に伴う所見以外にTREM-1, MCP-1, MIP-1beta, IL-8の上昇が認められる。[4]b. 気道病変の評価 臨床的には気道症状がなくても、検査で病変の存在が判明する場合もあるので呼吸機能検査と、吸気時・呼気時の胸部CT検査[13]の施行は最低限施行することが望まれる。胸部MRI所見はとくにT2強調画像で気道軟骨病変部の質的評価に有用で、CTに比較し軟骨局所の炎症と線維化や浮腫との区別をよりよく描出できる場合がある。c. 心血管病変の評価 無症状であっても、心電図と心エコーの検査を施行し、大動脈の病変が示唆される症例ではさらにCT, MRIによる検査の施行が望ましい。d. 中枢神経系合併した場合の重症度から考えてMR, CT, 脳波検査などを積極的に行い、中枢神経病変の有無は明らかにしておく必要がある。

#### 内科的治療

軽症例で、炎症が軽度で耳介, 鼻軟骨に限局する場合は、非ステロイド系抗炎症薬を用いる。効果不十分と考えられる場合は、少量の経口ステロイド剤を追加する。[14] 中等症例以上で、炎症が強く呼吸器, 眼, 循環器, 腎などの臓器障害や血管炎を伴う場合は、経口ステロイド剤の中等量から大量を用いる。具体的にはプレドニゾロン錠®30~60mg/日を初期量として2~4週継続し、以降は1~2週ごとに10%程度減量する。炎症が非常に強く生命予後に影響があると考えられる場合には、ステロイドパルス療法を考慮する。ステロイドの効果の不十分な場合、免疫抑制剤の併用を考える。具体的には、リウマトレックス®4~8mg/週, ネオオーラル®100~200mg/日が有用と思われる。

ステロイド剤単独では呼吸器症状の進行は阻止できないようであり呼吸器症状を持つものは、早期より免疫抑制剤の使用を考慮する。疫学調査の結果からはメトトレキサート、シクロスポリンに加えエンドキサンの有用性が示唆された。

抗TNF抗体製剤や抗IL6受容体抗体製剤などの生物学的製剤の使用が活動性炎症のコントロールに有用な場合がある。生物学的製剤の使用を検討する症例では、気道感染を含む感染症を顕在的に、あるいは潜在的に合併している場合も多く、安易な使用は避ける。

本邦疫学調査[1, 2]の結果からは、全体では9.0%の患者が死亡しており、その内訳は呼吸不全(36%), 肺炎(18%), 心血管病(9%), 脳血管障害(9%), 自殺(5%), 骨髄異形成症候群(5%), 白血病(5%), 不明(9%)となっている。呼吸器、心血管、中枢神経の症状がRPの予後に重要であり、これらの良好なマネジメントが必要である。今後は、重症度分類の有用性を評価し、それに基づいた標準化された治療プロトコルの確立が望まれている。

#### 文献

1. Oka H, Yamano Y, Shimizu J, et al. A large-scale survey of patients with relapsing polychondritis in Japan. *Inflammation and Regeneration* 2014;34:149-156.
2. 厚生労働科学補助金難治性疾患等克服研究事業、再発性多発軟骨炎の診断と治療体系の確立 平成24~25年度 総合研究報告書 研究代表者 鈴木 登. 平成26(2014)年3月
3. Suzuki N, Shimizu J, Oka H, Yamano Y, Yudoh K. Neurological Involvement of Relapsing polychondritis in Japan: An Epidemiological Study. *Inflammation and Regeneration* 2014;34:206-208;

4. Sato T, Yamano Y, Tomaru U, Shimizu Y, Ando H, Okazaki T, Nagafuchi H, Shimizu J, Ozaki S, Miyazawa T, Yudoh K, Oka H, Suzuki N. Serum level of soluble triggering receptor expressed on myeloid cells-1 as a biomarker of disease activity in relapsing polychondritis. *Modern Rheumatology* 2014;24:129-136. doi: 10.3109/14397595.2013. 852854.
5. Shimizu J, Oka H, Yamano Y, Yudoh K, Suzuki N. Cardiac involvement in relapsing polychondritis in Japan. *Rheumatology (Oxford)*. 2015; pii: kev320.
6. Arnaud L, Devilliers H, Suzuki N, et al. The Relapsing polychondritis disease activity index: development of a disease activity score for relapsing polychondritis. *Autoimmun Rev* 2012;12: 204-209.
7. Trentham DE, Le CH Relapsing polychondritis. *Ann Intern Med* 1998; 129:114-122.
8. Letko E, Zafirakis P, Baltatzis S, et al. Relapsing polychondritis: a clinical review. *Semin Arthritis Rheum* 2002 ;31:384-95.
9. McAdam LP, O'Hanlan MA, Bluestone R, et al. Relapsing polychondritis: prospective study of 23 patients and a review of the literature. *Medicine (Baltimore)* 1976;55:193-215.
10. Shimizu J, Oka H, Yamano Y, Yudoh K, Suzuki N. Cutaneous Manifestations of Patients with Relapsing Polychondritis: an association with extracutaneous complications. 投稿中.
11. Dib C, Moustafa SE, Mookadam M, et al. Surgical treatment of the cardiac manifestations of relapsing polychondritis: overview of 33 patients identified through literature review and the Mayo Clinic records. *Mayo Clin Proc* 2006 ;81:772-776.
12. Damiani JM, Levine HL. Relapsing polychondritis. Report of ten cases. *Laryngoscope (St.Louis)* 1979;89:929-946.
13. Matsushita S, Matsuoka S, Yamashiro T, et al. Quantitative computed tomography assessment of air trapping in relapsing polychondritis: correlations with spirometric values. *J Comput Assist Tomogr* 2014;38:968-971.
14. 鈴木登. 再発性多発軟骨炎. 今日の治療指針 2011. 医学書院 2010; 753-754.

表1 臨床像の特徴

臨床像	McAdamら(n=159)		本邦調査(n=239)	
	初発時	全経過	初発時	全経過
耳介軟骨	26 %	89 %	54 %	78 %
蝸牛・前庭障害	6.4 %	46 %		27 %
鼻軟骨	13 %	72 %		39 %
気道	14 %	56 %		50 %
喉頭				17 %
気管・気管支				34 %
眼症状	14 %	65 %		46 %
結膜				15 %
強膜				26 %
ブドウ膜				11 %
関節	23 %	85 %		39 %
皮膚		17 %		11 %
心血管系		27 %		7.1 %
神経系				9.6 %
腎障害				6.7%
骨髄機能障害				2.1%

## 表2 診断基準

---

### マクアダムらの診断基準 (McAdam's Criteria)

以下の3つ以上が陽性

1. 両側性の耳介軟骨炎
2. 非びらん性、血清陰性、炎症性多発性軟骨炎
3. 鼻軟骨炎
4. 眼炎症: 結膜炎、角膜炎、強膜炎、上強膜炎、ぶどう膜炎
5. 気道軟骨炎: 咽頭あるいは気管軟骨炎
6. 蝸牛あるいは前庭機能障害: 神経性難聴、耳鳴、めまい

生検(耳・鼻・気管)の病理学的診断は、臨床的に診断が明らかであっても基本的には必要である。

### ダミアニらの診断基準 (Damiani's Criteria)

1. マクアダムらの診断基準で3つ以上が陽性の場合、必ずしも組織学的な確認は必要ない
  2. マクアダムらの診断基準で1つ以上が陽性で、確定的な組織所見が得られる場合
  3. 軟骨炎が解剖学的離れた2箇所以上で認められ、それらがステロイド／タブソン治療に反応して改善する場合
-



表3

日本語版再発性多発軟骨炎疾患活動性評価票

医師名 \_\_\_\_\_

評価日 \_\_\_\_\_

患者ID番号 \_\_\_\_\_

この評価票では再発性多発軟骨炎に基づく症状のみを、  
過去28日以内に認められた症状について評価する。

点数	全身症状	点数	皮膚・腎症状
2	<input type="checkbox"/> 発熱(38度以上)	3	<input type="checkbox"/> 紫斑
	<input type="checkbox"/> リウマチ様症状	4	<input type="checkbox"/> 血尿
1	<input type="checkbox"/> 関節炎	6	<input type="checkbox"/> 蛋白尿
	<input type="checkbox"/> 軟骨炎	17	<input type="checkbox"/> 腎不全
3	<input type="checkbox"/> 胸骨柄軟骨炎		心血管症状
4	<input type="checkbox"/> 胸鎖軟骨炎	9	<input type="checkbox"/> 心膜炎
4	<input type="checkbox"/> 肋軟骨炎	16	<input type="checkbox"/> 大型そして/または中型血管障害
9	<input type="checkbox"/> 耳介軟骨炎(片側または両側)	17	<input type="checkbox"/> 心筋炎
9	<input type="checkbox"/> 鼻軟骨炎	18	<input type="checkbox"/> 急性大動脈弁または僧帽弁不全
	眼症状		神経症状
5	<input type="checkbox"/> 上強膜炎	12	<input type="checkbox"/> 運動または感覚運動神経障害
9	<input type="checkbox"/> 強膜炎	22	<input type="checkbox"/> 脳炎
9	<input type="checkbox"/> ぶどう膜炎		呼吸器症状
11	<input type="checkbox"/> 角膜潰瘍		呼吸器軟骨炎(喉頭、気管、気管支)
14	<input type="checkbox"/> 網膜血管炎	14	<input type="checkbox"/> 急性呼吸不全を伴わない
	生化学	24	<input type="checkbox"/> 急性呼吸不全を伴う
3	<input type="checkbox"/> CRP(2.0mg/dl以上)		その他の症状
	内耳機能障害		症状の詳細記
8	<input type="checkbox"/> 感音難聴		
12	<input type="checkbox"/> 前庭機能障害		
		<input type="checkbox"/>	総点数(RPDAIスコア)

この患者の疾患活動性を医師としてあなたが判断してください

- 活動性なし
- くすぶりあるいは時々
- 弱い活動性
- 中等度の活動性
- 高度の活動性

この患者の活動性を下の線に記入してください。



表4 RP 重症度分類(試案)

全身症状

2点 □ 発熱(38度以上)

リウマチ様症状

1点 □ 関節炎

軟骨炎

4点 □ 胸骨柄、胸鎖、肋軟骨炎

9点 □ 耳介軟骨炎(片側または両側)

9点 □ 鼻軟骨炎

眼症状

9点 □ 上強膜炎、強膜炎、ぶどう膜炎

11点 □ 角膜潰瘍

14点 □ 網膜血管炎

生化学

3点 □ CRP(2.0mg/dl 以上)

内耳機能障害

8点 □ 感音難聴

12点 □ 前庭機能障害

皮膚・腎症状

3点 □ 紫斑

6点 □ 血尿、蛋白尿

17点 □ 腎不全

以上のスコアで採点

軽症 1~8

中等症 8~13

重症 13~

以下の症状が存在する場合は重症

心血管症状(心膜炎、心筋炎、弁膜症および血管炎を含む何らかの血管障害)

神経症状(末梢神経障害、中枢神経症状)

呼吸器症状(呼吸不全の有無は問わない)

中等症以上は間接的にでも専門医の管理が望ましい

重症にて未受診者は直ちに専門医受診を要する

## II 全身性自己免疫疾患

### 再発性多発軟骨炎

Relapsing polychondritis

Key words : 軟骨細胞, 再発, 炎症, 耳介, 気道

鈴木 登

全身性自己免疫疾患

#### 1. 概念・定義

再発性多発軟骨炎 (relapsing polychondritis: RP) は, 1923年に初めて報告された, 外耳の腫脹, 鼻梁の破壊, 発熱, 関節炎を呈する, 全身の軟骨組織特異的に慢性かつ再発性の炎症をきたす比較的まれな難治性疾患である。軟骨の炎症が基本であるが, 軟骨細胞が存在しない部位にも炎症が認められる場合があるので, 注意が必要である。

#### 2. 疫学

アメリカからは人口100万人あたり3.5人と報告されている。我々が全国主要病院より行った疫学調査と人口動態を鑑みると, 患者数はおおよそ400-500人と推定される。本邦では, 発症年齢は3-97歳と広範囲に及び, 平均発症年齢は53歳, 男女比はほぼ1である。生存率は1986年の報告では10年生存率55%とされていたが, その後の報告(1998年)では, 8年生存率94%である。我々の調査では報告症例の中の9%が死亡していたことから, 90%以上の生存率と推定している<sup>1,2)</sup>。

#### 3. 病因・病態

原因不明で, 血液疾患や膠原病との合併もしばしば認め, 病態の複雑さが推定される。自己免疫の関与も考えられている<sup>3)</sup>。RPの特徴として, 時間経過とともに, または治療によって炎

症は次第に治まるが, 再発を繰り返し, 徐々にそれぞれの臓器の機能不全症状が強くなる。

特有の症状としては, 軟骨に一致した疼痛, 発赤, 腫脹であり, 特に鼻根部や耳介の病変は特徴的であり, 炎症は, 耳介, 鼻柱, 強膜, 心臓弁膜部の弾性軟骨, 軸骨格関節における線維軟骨, 末梢関節および気管の硝子軟骨などのすべての軟骨で起こりうる。軟骨炎は再発を繰り返し, 耳介や鼻の変形をもたらす。炎症発作時の症状は, 軟骨部の発赤, 腫脹, 疼痛であるが, 重症例では発熱, 全身倦怠感, 体重減少もみられる<sup>1-5)</sup>。

突然の難聴やめまいを起こすこともある。多発関節炎もよく認められる。関節炎は通常, 移動性かつ左右非対称性で, 骨びらんや変形を起こさないとされる。彼我の差異はあまり認めないが, 他の大規模レポートも参考にすると本邦では関節軟骨炎と心・血管系障害の頻度が低い印象がある<sup>1-7)</sup>。

喉頭, 気管, 気管支の軟骨病変によって嘔声, 窒息感, 喘鳴, 呼吸困難など様々な呼吸器症状をもたらす。あるいは気管や気管支の壁の肥厚や狭窄は無症状のこともあり, 逆に二次性の気管支炎や肺炎を伴うこともある。呼吸器症状初発例では80%以上に気管切開を要するようになると報告されている。気道閉塞を生じる場合には救急の対応が必要になる。本邦RPにおいてはほぼ半数の症例が気道病変をもつ。

呼吸器症状は気道狭窄によって上記の症状が

Noboru Suzuki: Department of Immunology, St. Marianna University School of Medicine 聖マリアンナ医科大学免疫学

表1 再発性多発軟骨炎の診断基準

マックアダムスの診断基準 (McAdam's criteria)
以下の3つ以上が陽性
・ 両側性の耳介軟骨炎
・ 非びらん性, 血清陰性, 炎症性多発性関節炎
・ 鼻軟骨炎
・ 眼炎症: 結膜炎, 角膜炎, 強膜炎, 上強膜炎, ぶどう膜炎
・ 気道軟骨炎: 喉頭あるいは気管軟骨炎
・ 蝸牛あるいは前庭機能障害: 神経性難聴, 耳鳴り, めまい
生検(耳, 鼻, 気道など)による病理学的診断は, 臨床的に診断が明らかであっても基本的には必要である
ダミアニの診断基準 (Damiani's criteria)
1) McAdamsの基準で3つ以上が陽性場合は必ずしも組織学的な確認は必要ない
2) McAdamsの基準で1つ以上陽性で, 確定的な組織所見が得られる場合
3) 軟骨炎が解剖学的に離れた2カ所以上で認められ, それらがステロイド/ダブソン治療に反応して改善する場合

引き起こされるが, 狭窄には幾つかの機序が存在する。炎症による気道の肥厚, 炎症に引き続く気道線維化, 軟骨消失に伴う吸・呼気時の気道虚脱, 両側声帯麻痺などである。気道狭窄と粘膜機能の低下はしばしば肺炎を引き起こし, 死亡原因となる。炎症時には気道過敏性が亢進していて, 気管支喘息との鑑別を要することがある。この場合には, 吸引, 気管支鏡, 気切, 気管支生検などの処置はすべて死亡の誘因となるため, 気道を刺激する処置は最小限にとどめるべきである。一方で気道閉塞の緊急時には気切および気管チューブによる呼吸管理が必要になる。

次の生命予後の決定因子としては心・血管系症状<sup>7)</sup>と中枢神経症状<sup>8)</sup>がある。大動脈弁閉鎖不全や僧帽弁閉鎖不全などの心臓弁膜症, 動脈瘤などの大動脈病変を伴うことがある。心・血管系症状においては, 無症状に進行することも多く積極的な検索が望まれる。自覚的に心臓血管系の症状はなくても, 定期的な心臓の超音波検査が勧められる。外科的な手術が必要になる場合もあるが, 軟骨炎のために必ずしも成功率は高くないとされる。

脳梗塞, 脳出血, 脳炎, 髄膜炎などの中枢神経障害も本邦では全経過の中ではおよそ1割の患者に認める<sup>9)</sup>。本邦では中枢神経障害合併症

例は男性に有意に多く, これらの死亡率は18%と高いことが明らかになった<sup>9)</sup>。

眼症状としては, 強膜炎, 上強膜炎, 結膜炎, 虹彩炎, 角膜炎を伴うことが多い。まれには視神経炎をはじめ, より重症な眼症状を伴うこともある。皮膚症状には, 口内アフタ, 結節性紅斑, 紫斑などが含まれる。まれに腎障害および骨髄異形成症候群・白血病を認め重症化する。

#### 4. 診断と鑑別診断

現在の診断基準にはMcAdamsの診断基準(1976年)<sup>4)</sup>やDamianiの診断基準(1979年)<sup>9)</sup>が用いられている(表1)。いずれも, 臨床所見の有無を中心としたものである。実際上は, ①両側の耳介軟骨炎, ②非びらん性多関節炎, ③鼻軟骨炎, ④結膜炎, 強膜炎, ぶどう膜炎などの眼の炎症, ⑤喉頭・気道軟骨炎, ⑥感音性難聴, 耳鳴り, めまいの蝸牛・前庭機能障害, の6項目の3項目以上を満たす, あるいは1項目以上陽性で, 確定的な組織所見が得られる場合に診断される。

診断を確定する目的で, 病変部の生検を行い, 組織学的に軟骨組織周囲への炎症細胞浸潤を認めることを確認することが望ましい。気道炎症を悪化させる可能性を考慮すると, 気管の生検は可及的に避け他の部位の生検を優先する。

表2 頭部炎症でのRPの鑑別疾患

眼部	感染, Behçet病, SLE, Wegener肉芽腫症, サルコイドーシス, 血清反応陰性強直性脊椎炎
耳部	感染, 外傷, 虫刺症, 日焼け, 凍傷
鼻部	Wegener肉芽腫症, 梅毒, ハンセン病, サルコイドーシス

II

全身性自己免疫疾患

生検のタイミングは極めて重要である。現在では診断確定のため生検所見が必須といたいところであるものの、疑いない症状(症状の組み合わせ)を示している患者でも生検時に軟骨の炎症所見が得られない場合もある。

炎症所見が弱い症例において、臓器機能不全に伴う症状から発症した場合には診断は極めて困難である。RPでは関節リウマチや全身性エリテマトーデスをはじめとする膠原病や全身性血管炎などを合併することがある。表2に頭部炎症での鑑別すべき疾患を示す。

全身の検索による臓器病変の程度、組み合わせにより重症度を判定して適切な治療方針を決定することが必要である。重症度の判定基準にコンセンサスはないが、以下に述べる repalsing polychondritis disease activity index (RPDAI) (図1)<sup>10)</sup>を基本にした試案(表3)を我々は提唱している。

### 1) 疾患活動性と重症度分類

多彩な症状をもつRPでは診断後においては疾患活動性を評価することは簡単ではない。Laurent Arnaud博士らと国際多施設共同研究を行い、RPの疾患活動性を評価する指標としてRPDAI(図1)<sup>10)</sup>を提唱した。各国の専門家がそれぞれの意見を自由に述べた後に、意見交換を繰り返して合意を形成して活動性評価ツールとしてのRPDAIを作成した。具体的には、複数の専門家が、関節炎をもつ患者では活動性に対する評価は何点と考えるか報告し、それらを持ち寄り検討の後コンセンサスを得て、関節炎は最終的に1点となった。一方、脳炎や急性呼吸不全を示す患者は、同じプロセスを経てそれぞれ22点や24点の高点数を与えられている。

RPDAIそのものに関しても、今後実際の症例を対象に前向き試験でその有用性の多面的に評価する必要はあるものの、我々は現時点ではRPDAIを基盤に次に示す重症度分類を試案として提唱している。原著では、RPにおける医師の活動性に対する評価(physician's global assessment: PGA)はRPDAIに良く相関することが示されている<sup>10)</sup>。これらに基づきRPDAIのそれぞれの症状に対する重みづけ(点数の差異)が重症度評価に流用できることが支持される。

我々の提唱する重症度分類を概説する。致命的になりうる心血管、神経症状、呼吸器症状のあるものは、その時点で重症と考える。腎不全、失明の可能性をもつ網膜血管炎も重症と考える。それ以外は症状検査所見の総和で重症度を評価している。総合計が13点以上を重症、8点以上を中等症、それ以下を軽症と判定する(表3)。

### 2) 診断と重症度判定に必要な検査

RPの診断に特異的な検査は現時点では存在しないので、診断基準を基本として、臨床所見、血液検査、画像所見、および軟骨病変の生検の総合的な判断によって診断がなされる。生命予後を考慮すると軽症にみえても気道病変、心・血管系症状および中枢神経系の検査は必須である。

#### a. 血液検査所見

炎症状態を反映して血沈、CRPが上昇し、正球性正色素性貧血を認めることがある。およそ50%が抗type II コラーゲン抗体陽性、22-66%が抗核抗体陽性(homogeneous or speckled pattern)、約16%がリウマトイド因子陽性、一部で抗好中球細胞質抗体(ANCA)陽性となる。慢性炎症に伴う所見以外にTREM-1、MCP-1、

**日本語版再発性多発軟骨炎疾患活動性評価票**

医師名 \_\_\_\_\_

評価日 \_\_\_\_\_

患者ID番号 \_\_\_\_\_

この評価票では再発性多発軟骨炎に基づく症状のみを、過去28日以内に認められた症状について評価する。

<p>点数 全身症状</p> <p>2 <input type="checkbox"/> 発熱(38度以上) リウマチ様症状</p> <p>1 <input type="checkbox"/> 関節炎 軟骨炎</p> <p>3 <input type="checkbox"/> 胸骨柄軟骨炎</p> <p>4 <input type="checkbox"/> 胸鎖軟骨炎</p> <p>4 <input type="checkbox"/> 肋軟骨炎</p> <p>9 <input type="checkbox"/> 耳介軟骨炎(片側または両側)</p> <p>9 <input type="checkbox"/> 鼻軟骨炎</p> <p>眼症状</p> <p>5 <input type="checkbox"/> 上強膜炎</p> <p>9 <input type="checkbox"/> 強膜炎</p> <p>9 <input type="checkbox"/> ぶどう膜炎</p> <p>11 <input type="checkbox"/> 角膜潰瘍</p> <p>14 <input type="checkbox"/> 網膜血管炎</p> <p>生化学</p> <p>3 <input type="checkbox"/> CRP(2.0mg/dl以上)</p> <p>内耳機能障害</p> <p>8 <input type="checkbox"/> 感音難聴</p> <p>12 <input type="checkbox"/> 前庭機能障害</p>	<p>点数 皮膚・腎症状</p> <p>3 <input type="checkbox"/> 紫斑</p> <p>4 <input type="checkbox"/> 血尿</p> <p>6 <input type="checkbox"/> 蛋白尿</p> <p>17 <input type="checkbox"/> 腎不全</p> <p>心血管症状</p> <p>9 <input type="checkbox"/> 心膜炎</p> <p>16 <input type="checkbox"/> 大型そして/または中型血管障害</p> <p>17 <input type="checkbox"/> 心筋炎</p> <p>18 <input type="checkbox"/> 急性大動脈弁または僧帽弁不全</p> <p>神経症状</p> <p>12 <input type="checkbox"/> 運動または感覚運動神経障害</p> <p>22 <input type="checkbox"/> 脳炎</p> <p>呼吸器症状</p> <p>呼吸器軟骨炎(喉頭、気管、気管支)</p> <p>14 <input type="checkbox"/> 急性呼吸不全を伴わない</p> <p>24 <input type="checkbox"/> 急性呼吸不全を伴う</p> <p>その他の症状 症状の詳細記</p>
---	--

総点数(RPDAIスコア)

この患者の疾患活動性を医師としてあなたが判断してください

活動性なし

くすぶりあるいは時々

弱い活動性

中等度の活動性

高度の活動性

この患者の活動性を下の線にしるしてください。

活動性全くなし 最強の活動性

---

図1 日本語版再発性多発軟骨炎疾患活動性評価票

MIP-1 $\beta$ , IL-8の上昇が認められる<sup>11)</sup>。

#### b. 気道病変の評価

臨床的には気道症状がなくても、検査で病変の存在が判明する場合もあるので呼吸機能検査と、吸気時・呼気時の胸部CT検査<sup>12)</sup>は最低限施行することが望まれる。

・呼吸機能検査：スパイロメトリー、フローボリュームカーブでの呼気気流制限の評価(気道閉塞・虚脱による1秒率低下，ピークフロー低下など)。

・胸部X線検査(気管・気管支狭小化，無気肺，気管・喉頭軟骨の石灰化など)。

・胸部CT検査(気道狭窄，気道壁の肥厚，軟骨石灰化など)：吸気時のみでなく呼気時にも撮影すると病変のある気管支は狭小化がより明瞭になり，病変のある気管支領域は含気が減小するので肺野のモザイク・パターンが認められる<sup>12)</sup>。

・胸部MRI(特にT2強調画像で気道軟骨病変部の質の評価に有用)：MRI所見はCTに比較し

表3 RP重症度分類(試案)

全身症状
2□発熱(38℃以上)
リウマチ様症状
1□関節炎
軟骨炎
4□胸骨柄炎, 胸鎖炎, 肋軟骨炎
9□耳介軟骨炎(片側または両側)
9□鼻軟骨炎
眼症状
9□上強膜炎, 強膜炎, ぶどう膜炎
11□角膜潰瘍
14□網膜血管炎
生化学
3□CRP(2.0mg/dl以上)
内耳機能障害
8□感音難聴
12□前庭機能障害
皮膚・腎症状
3□紫斑
6□血尿, タンパク尿
17□腎不全
以上のスコアで採点
軽症 1-8
中等症 8-13
重症 13~
以下の症状が存在する場合は重症
心血管症状(心膜炎, 心筋炎, 弁膜症および血管炎を含む何らかの血管障害)
神経症状(末梢神経障害, 中枢神経症状)
呼吸器症状(呼吸不全の有無は問わない)
中等症以上は間接的にでも専門医の管理が望ましい
重症にて未受診者は直ちに専門医受診を要する

軟骨局所の炎症と線維化や浮腫との区別をよりよく描出できる場合がある。

・気管支鏡検査: RP患者は気道過敏性が亢進しているため, 検査中や検査後に症状が急変することも多く, 周到的な準備が望ましい。

・気管支腔内超音波検査法(endobronchial ultrasonography: EBUS): 軟骨病変の程度や炎症による浮腫性変化などが評価できる。EBUSで気管支壁は層状構造にみえ, 第3, 4, 5層は気管支軟骨に相当し, この軟骨層が特徴的な所見を呈する。炎症で浮腫状に厚くなったり, 薄くなり消失したり, 厚さが不均一になったりして

いる。これは他の疾患による気道病変との鑑別にも役立つ。

### c. 心血管病変の評価

大動脈瘤や心臓弁の異常は, 特に無症状であることが多いので, 症状がなくても, 心電図と心エコーの検査を施行し, 大動脈の病変が示唆される症例ではさらにCT, MRIによる検査の施行が望まれる。

### d. 中枢神経系病変の評価

MR, CT, 脳波検査などを積極的に行い, 中枢神経病変の有無は明らかにしておく必要がある。

## 5. 治療と予後

ステロイド療法が基準となる<sup>5)</sup>。

### 1) 内科的治療

[軽症例] 炎症が軽度で耳介, 鼻軟骨に限局する場合は, 非ステロイド系抗炎症薬を用いる。効果不十分と考えられる場合は, 少量の経口ステロイドを追加する。

[中等症例] 炎症が強く呼吸器, 眼, 循環器, 腎などの臓器障害や血管炎を伴う場合は, 経口ステロイドの中等~大量を用いる。具体的にはプレドニゾン錠30-60mg/日を初期量として2-4週継続し, 以降は1-2週ごとに10%程度減量する。

[重症例] 炎症が非常に強く生命予後に影響があると考えられる場合には, ステロイドパルス療法を考慮する。

[ステロイド抵抗例] ステロイド減量で炎症が再燃する場合や単独使用の効果が不十分な場合, 免疫抑制剤の併用を考える。具体的には, リウマトレックス<sup>®</sup>4-8mg/週, ネオーラル<sup>®</sup>100-200mg/日が有用と思われる。欧米および本邦ともにステロイド単独では呼吸器症状の進行は阻止できないようであり呼吸器症状をもつものは, 早期より免疫抑制剤の使用を考慮する。

### 2) 外科的治療

呼吸困難を伴う症例には気管切開を要する場合がある。気管気管支の狭窄に対して, ステンント留置や気管形成術が用いられ, 有効な症例が存在する。ステント留置は, ①中枢気道の高度

な狭窄が画像で確認され、②狭窄部より末梢の肺実質が保たれている症例に実施されるが、頻回の肺炎再発例にも用いられることがある。呼吸器症状の強い症例にはしばしば非侵襲的陽圧換気療法(bi-phasic positive airway pressure: BIBAP)が用いられる。

心・血管系症状に対して外科的手術が必要となる場合があるが、感染やparavalvular leak/膿瘍形成といった合併症も多く、慎重に適応を考える必要がある。

我々の疫学調査<sup>1)</sup>によると、全患者中4.6%は症状がすべて解消された状態を維持している。さらに66.5%の患者は病勢がコントロール下

にあり、合計で71.1%の患者においては治療に対する何らかの反応がみられている。一方、13.4%の患者においては治療は限定的効果を示したのみであり、3.8%の患者では病態悪化または再発がみられた。

9.0%の患者が死亡しており、その内訳は呼吸不全(36%)、肺炎(18%)、心血管病(9%)、脳血管障害(9%)、自殺(5%)、骨髄異形成症候群(5%)、白血病(5%)、不明(9%)となっている。

今後は、重症度分類の有用性を評価し、それに基づいた標準化された治療プロトコルの確立が望まれる。

## ■ 文 献

- 1) Oka H, et al: A large-scale survey of patients with relapsing polychondritis in Japan. *Inflammation and Regeneration* 34: 149-156, 2014.
- 2) 岡 寛ほか: 再発性多発軟骨炎の全国疫学調査. *リウマチ科* 44: 381-383, 2010.
- 3) Trentham DE, Le CH: Relapsing polychondritis. *Ann Intern Med* 129: 114-122, 1998.
- 4) McAdam LP, et al: Relapsing polychondritis: prospective study of 23 patients and a review of the literature. *Medicine(Baltimore)* 55: 193-215, 1976.
- 5) 厚生労働科学補助金難治性疾患等克服研究事業, 再発性多発軟骨炎の診断と治療体系の確立平成24-25年度 総合研究報告書, 研究代表者 鈴木 登, 平成26(2014)年3月.
- 6) Letko E, et al: Relapsing polychondritis: a clinical review. *Semin Arthritis Rheum* 31: 384-395, 2002.
- 7) Dib C, et al: Surgical treatment of the cardiac manifestations of relapsing polychondritis: overview of 33 patients identified through literature review and the Mayo Clinic records. *Mayo Clin Proc* 81: 772-776, 2006.
- 8) Suzuki N, et al: Neurological involvement of relapsing polychondritis in Japan: An epidemiological study. *Inflammation and Regeneration* 34: 206-208, 2014.
- 9) Damiani JM, Levine HL: Relapsing polychondritis. Report of ten cases. *Laryngoscope(St. Louis)* 89: 929-946, 1979.
- 10) Arnaud L, et al: The Relapsing polychondritis disease activity index: development of a disease activity score for relapsing polychondritis. *Autoimmun Rev* 12: 204-209, 2012.
- 11) Sato T, et al: Serum level of soluble triggering receptor expressed on myeloid cells-1 as a biomarker of disease activity in relapsing polychondritis. *Mod Rheumatol* 24: 129-136, 2014.
- 12) Matsushita S, et al: Quantitative computed tomography assessment of air trapping in relapsing polychondritis: correlations with spirometric values. *J Comput Assist Tomogr* 38: 968-971, 2014.



V. 平成27年度班員名簿

平成 27 年度 難治性疾患等政策研究事業(難治性疾患政策研究事業)

研究分野	ライフサイエンス		
研究課題名	難治性疾患等政策研究事業(難治性疾患政策研究事業) 再発性多発軟骨炎の診断と治療体系の確立		
課題番号	H27-難治等(難)一般-010		
区分	氏名	所属	職名
研究代表者	鈴木 登	聖マリアンナ医科大学 難病治療研究センター・医学部免疫学	教授
研究分担者	遊道 和雄	聖マリアンナ医科大学 難病治療研究センター	教授
研究分担者	山野 嘉久	聖マリアンナ医科大学 難病治療研究センター	准教授
研究分担者	清水 潤	聖マリアンナ医科大学 免疫学・病害動物学	准教授

